（イ）宮中に參ること。　（ロ）かわひさうなこと。　（ハ）生みの母にかはつて育ててくれる人。

（ニ）いろいろな物語りをかいた本。　（ホ）お坊さんの家。

四、次の詩のわけを書きなさい。

行く水は少しにごれど、せせらぎの音もまさりて、よろこびを歌ふがごとく、行くわれを迎ふるごとし。

以上

初等科國語（八）

一、玉のひびき

御製

第一首

みさきに晝夜の別なく寄せてゐる荒波に、びくともしないで、波をしのいでゐるいはほの力に感心させられる。

第二首

東の方の國も西の方の國も、お互に交はりをかはして、世界中の榮へるやうに、新しい年の始めにお祈りしたまふ。

大正天皇御製

しほ風の吹いて來る、いその松原は、その風の強いのによく耐へて、松はみなたくましい枝ぶりをしてゐる。

明治天皇御製

第一首

昔の書物を開いてみる度に、自分が今治めてゐる國は、どうであらうかと日夜思はれる。

第二首

うすみどり色に澄み渡つた大空のやうに廣々とした心を自分も持ちたいものだなあ、

第三首

目に見ることの出來ないけれど神樣の御心に通じるものは、人のまこと心である。

第四首

大空を指さしのぼつて行く朝日のやうに、すがすがしい心を持ちたいものである。

第五首

御殿の窓といふ窓を皆開けさせて、四方に今をさかりと咲いてゐる櫻の花をみる。

昭憲皇太后御歌

第一首

朝毎に向かふ鏡のやうにくもりない心を持ちたいものだ。

第二首

神武天皇の御陵の御前に玉串をささげ天皇の高いみいつをあふぎ奉る。

【語句の讀みとわけ】

玉のひびき（タマのひびき）　玉のやうな美しい御製、御歌

たゆまず　休みなく

むつみかはして　親しく交はりあつて

心ともがな　心としたいものだ、と言ふ願ひの意

もたまほし　持ちたいものだ。

窓てふまど（マドてふまど）　窓といふ窓は。ありつたけの窓。

磯（イソ）　潮のよせるところ

こそ……れ　係り結びです。

こそ……けれ　同じく係り結び。

二、山の生活二題

銅山

【文意】

三つの部に分れて、入坑前のやうす、坑内でのやうす、終りに歸路につくありさまが書かれて

ありますが、その中に生活する人々が互に信じ合ひ助けあつて秩序よく、朗らかに働いてゐるやうすが書かれてゐます。

【節　意】

第一節（まつしぐらに坑道へ進んで行くまで。）

坑内へ入るまでのやうすで、明朗で、そして皆が意氣込んで仕事につくことなど。

第二節（七時間の勞働時間も、やがて過ぎてしまふまで）

昇降機から採鑛現場へついて、穴をあける、爆薬をつめる、爆破させる、――運搬して、坑内に支柱を組立てる。このやうな仕事が整然と行はれて、人々は皆信じあひ、助けあつて仕事にはげんでゐる。

第三節（終りまで）

七時間勞働も終つて、歸途につく、外に出てみると、今さらのやうに自然の美しさに驚く。

石の山

【文　意】

御影石の山から、石を取る方法や、その仕事を通して、石工たちが次第に人としての修行をつんで行くことが書かれてゐます。

【節　意】

第一節（山の道をすべるやうに運ばれて行く。まで）

御影石の取り方で、少しづゝ穴をあける。そして火薬をつめ、大きく割り、それを又二つに、四つに割つて、石積み車につんで行く。

第二節（終りまで）

石工たちを中心として書かれてゐる。丈夫さうであるが、山と比べてたよりなく見えること、弟子入りをしてからの修行を積んで一人前の石工になるまでの生活や苦心が書かれてゐます。

【語句の讀みとわけ】

銅山	（ドウザン）	銅鑛を掘る山
入坑	（ニユウカウ）	地中にほつた穴へ入る
鑛員	（クワウイン）	鑛石をほり出す人
軌道車	（キドウシヤ）	レールの上を走る車。
係員	（カカリイン）	そこの係の人
撃器	（カクセイキ）	撃を電氣の力で大きくする器具
快活	（クワイカツ）	愉快で朗らか
神棚	（カミダナ）	神様をおまつりしてある棚

通過（ツウクワ）　通りすぎる
反響（ハンキョウ）　ひびきかへる
看板（カンバン）　廣告をしてある板
昇降機（ショウカウキ）　昇つたり降りたりする機械
寶（タカラ）
光澤（コウタク）　光やつや
硬度（カウド）　かたさの割合
運搬（ウンパン）　運び出すこと
滿載（マンサイ）　一ぱいつむこと
念じながら（ネンじながら）　祈りながら
一分（一プン）　ちよつとのすき
危險（キケン）　あぶないこと
連絡（レンラク）　つらなり。つづき。
同志（ドウシ）　同じことをし同じ考へを持つてゐる人
勞働（ラウドウ）　ほねをりわざをする。力仕事をすること
交代（カウタイ）　他の人とかはる

疲れた（ツかれた）　きれもの
歎聲（クワンセイ）　てりかへる
清風（セイフウ）　大變やさしい。
陣（ジン）　物事にたへる力。

一（石の山）

刃物（ハモノ）　よろこびのこえ
反射（ハンシャ）　きよくすずしい風が一しきり吹いて
生やさしい（ナマやさしい）　大變やさしい。
根氣（コンキ）　物事にたへる力。
掘る（ホる）
日がな一日　日中の長い一日
石工（イシク）　石を割つたり、細工したりする人
掃除（サウジ）
雲母（ウンモ）　鑛石の一種
判斷（ハンダン）　見分ける

三、孔子と顏回

【文　意】

六節に分れて、孔子とその弟子顏回との師弟の交はりを通じて、人としての、清らかさ、美しさが書かれてゐます。

【節　意】一から六までに分れてゐます、

第一節

孔子が顏回の死にあつて、自分自身のことのやうに悲しんだこと。

第二節

匡といふ所で孔子が思はぬ難に會つた時に、孔子は弟子を思ひ、顏回は師をしたふ心が書かれてゐます。

第三節

陳蔡の厄に會ひ、多くの弟子たちからの不平を言ひ出したけれど顏回だけは、孔子の眞心を知つてゐた。

第四節

孔子が弟子を敎へるのに、その才能に應じて道を說いたことを「仁」といふことについて書かれてゐます。

第五節

孔子が顏回をほめて言つたことと顏回が孔子をたたへて言つたことが書かれてゐて、これによつても孔子と顏回が非常にすぐれてゐた人であつたことがわかります。

第六節

終りの文章で以上のことをまとめて、孔子よりも先に死んだ顏回に對して孔子が思ひ出を書いたものです。

【語句の讀みとわけ】

孔子（コウシ）　支那の偉人であり、世界の偉人です
顏回（ガンクワイ）　孔子に最も信賴された弟子
信頼（シンライ）　信じたよる
後繼者（コウケイシヤ）　あとをついでくれる人
悲痛（ヒツウ）　いたみ、かなしむこと
さかのぼる　前のことにもどる
ひたすら　そればかり、一途に
慕つて（シタつて）　したふこと
厄（ヤク）　わざはひ

あいにく　折悪く
困難（コンナン）　なんぎくるしみ
際会（サイクワイ）　であふこと
き一本　純であつてまざりけのないこと
とがり聲（とがりゴエ）　鋭い聲。不平のこもつた聲
德（トク）　正しい道にかなつた行ひ
修まつた（オサまつた）　出來上つた
君子（クンシ）　德の修まつた立派な人
平然（ヘイゼン）　平氣な樣子
小人（セウジン）　德の修まらない人のこと
容れて（イれて）　取り上げて
必ず（カナラず）　きつと
説く（トく）　せつめいをする
才能（サイノウ）　ちえのはたらき
仁（ジン）　あはれみ、おもひやり、なさけ
慾望（ヨクボウ）　もとめのぞむこと

會得（エトク）　心にさとり知ること
啓發（ケイハツ）　ひらきすゝめる
短命（タンメイ）　命がみぢかい

四　奈良の四季

【文意】

奈良の風景や古のあとなどを四季に分けて韻文（インブン）によつて書かれてゐて、俳句も加へて、一層よく表はされてゐます。

【節意】詩の形になつてゐるので一くぎりごとに分けてみませう。

第一は

奈良の春を歌つたもので、若草山から春日野に渡つて、かすみが立ちこめ、櫻の花が咲いてゐる。その樣子といひ、花の色といひ昔のままである。俳句のわけは、奈良は古都で、大路小路は、七重八重にめぐらされてゐて、七堂伽藍の立派な寺もあり、八重櫻も美しく咲いてゐる。

第二は

東大寺の中の大佛殿に佛燈の光が今もなほ輝いて、天平の昔に、さかえた佛教が正倉院の御物と共に今もまたさかえてゐる。俳句は蕪村の作で「をひの僧を東大寺へたづねて行くと、ちよ

うど蟲干しをしてゐた。」夏の季節のこと。

第三は

滿月が三笠山をはなれてのぼり、猿澤の池に浮んでゐる。この美しい月は鹿の鳴く聲に、さそはれて出て來たのでせう。といふ意で俳句は、やはり蕪村の作で「この十五夜の月を眺めてゐると昔他國にゐて、ふるさとをしたつて「天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも」とよんで死んだ仲麻呂のことが思ひ出される、今夜はその靈をなぐさめる魂祭をしよう」といふことです。

第四は

奈良の郊外のことで冬景色を歌つたものです。佐保の川水はあせてしまつて石の間を流れる水の音も靜かである。ふりかへてみると葛城の山上には雪が白くかゝつてすがすがしい。俳句は大佛殿の大きいことや奈良郊外の冬景色が廣々としてゐることをよんだもので、大佛殿の屋根が見えてゐるけれど、歩いても歩いても遠い向ふの方にみえるといふのです。

【語句の讀みとわけ】

四季（シキ）　春、夏、秋、冬のこと

古き都のなごり（フルきミヤコ）　古い都のなごりを思はせる

いへらく　いつたことに

大佛殿（ダイブツデン）

天平の（テンピヤウの）　聖武天皇の御代の頃

魂祭（クママツリ）　お盆の會のことであるが、ここでは靈をまつることをさしたのです。

水あせて　水が少なくなつて

五、修行者と羅刹

【文意】

一人の修行者が雪山の山の中で、難行苦行して、さとりを開かうとして、一命をすててまでも、そのさとりの道を求めやうとして、つひにさとりの道を得られたことが修行者と羅刹の對話によつて表はされてゐます。

【節意】

第一節（ふとこのことばに耳を傾けた。まで）

いろは歌の前半分が美しい聲で歌はれ、修行者の耳に入つて來た。

第二節（大きなよろこびであつた。まで）

難行苦行に疲れた修行者のはげしい道を求める心が書かれてゐます。

第三節（心は喜びでいっぱいになった。まで）

修行者と恐しい羅刹の對話になつてゐて、修行者が恐しい羅刹の餌食になるのを忘れて、悟りを開かうとする心持が書かれてゐます。

第四節（終りまで）

さとりの道を世に傳へるために修行者が取つた方法と最後に永遠の生命を得て、自身の命を羅刹にあたへやうとしたが、その羅刹は帝釋天の姿になつて、修行者を禮拜した。

【語句の讀みとわけ】

難行苦行	（ナンギョウクギョウ）	なんぎなことや苦しい行
渇者	（カツシヤ）	のどのかはいた人
形相	（ギョウソウ）	かほかたちのこと
無知非道	（ムチヒドウ）	智識もなく道もわきまへてゐないこと
否定	（ヒテイ）	そうでないとすること
悟り	（サトリ）	人のいろいろなまよひをはらつて、まことの道に入ること
終生	（シユウセイ）	一生のこと
生肉	（ナマニク）	
超越	（テウエツ）	のりこへてしまふ

慈はか	（アサはか）	考へのあさいこと
あまねく		ひろく
一言半句	（イチゴンハンク）	みじかひことばのこと
妙なる	（タヘなる）	非常にすぐれて立派なこと
端嚴	（クンゴン）	ただしくおごそかなこと

六　母の力

【文意】

三十才の井上聞多が重傷を受けて、全くたすからないと思はれた生命を母の愛情によつて、一命を取りとめることが出來たといふ、母の慈愛と尊い母の力について書かれてゐます。

【節意】

第一節（反對黨はぐうの音も出なかつた。まで）

毛利侯の御前會議でのやうす。

第二節（自宅へ運ばれた。まで）

歸途聞多が怪漢におそはれて、重傷を負ひ、農家の家にのがれ自宅へかつぎ込まれたこと。

第三節（病床にさめざめと泣いた。まで）

かつぎ込まれた閑多を介抱する人々のやうす、又閑多が母の懸命の頼みにより、兄の刀を免れ醫者の手當てと母の必死の看護によつて一命を取り止めたこと。

第四節（終りまで）

閑多があとになつてつくづく母の慈愛に泣き、その後の立身について書かれてゐます。

【語句の讀みとわけ】

切迫（セツパク）　おしせまること
毛利侯（モウリコウ）　毛利の殿様
氣鋭（キエイ）　元氣があつて鋭いこと
主張（シユチヨウ）　自分の考へをのべたてる
議論（ギロン）　意見をたたかはすこと
怪漢（クワイカン）　あやしいぞく
重傷（ジユウシヨウ）　おもいきず
氣丈（キジヨウ）　氣持がしつかりしてゐること
無意識（ムイシキ）　自分の考へのない時のこと（知らないうち）
出血（シユツケツ）　血の出ること

あさましい　なさけない
任せて（マカせて）　その通りに
是非（ゼヒ）　よいも、悪いも、善悪
一滴（イツテキ）　一しづく
必死（ヒツシ）　いのちがけ
さげ緒（さげーヲ）　刀のつかのところについてゐるひも
疊針（タタミバリ）　疊をぬふ針
信望（シンバウ）　信頼
非命（ヒメイ）　災害又は負傷などによつて命を失ふこと

七、鎌倉

【文意】

鎌倉の名所の順にしたがつて古蹟や名所が七五調の韻文で表はされてゐます。

【節意】

第一は

七里が濱の海岸傳ひに稲村が崎があり、そこは名將新田義貞が劍を海に投げ入れて潮の引く樣

にいのり、攻め入つたといふ古戰場である。

第二は

極樂寺坂を越えて行けば、長谷觀音の堂がありその堂の近くには露坐の大佛がおいでになる。

第三は

長谷から由比が濱を右の方に見ながら、雪の下の道を歩いて行くと八幡宮のおやしろがある。

第四は

石のかいだんを登つて行くと、左の側に高いいちやうの木があります、この木に遠い昔からのうつり變りを尋ねてみたいものだ。

第五は

若宮堂では、頼朝が靜御前の舞を見た、その當時のことがしのばれる。

第六は

鎌倉宮にお參りしては、護良親王が尊氏のために、こゝで命を失はれた御心を思ひやればいきどほりの涙がわき上つてきます。

第七は

この樣に考へれば幕府を開いてから七百年もたつてゐて、その間に盛衰興亡があつて、夢に似てゐる。頼朝の墓もこけが一面に生えてゐる。

第八は

建長寺や圓覺寺などの古い寺に立つてゐる山門のあたりに吹く松風の響きには、今も變らない昔の音がこもつてゐます。

【語句の讀みとわけ】

磯傳ひ（イソヅタひ）　海岸づたひ
露坐（ロザ）　あまざらし
登るや（ノボるや）　のぼること
問はばや（トはばや）　尋ねてみたい
跡（アト）
悲憤（ヒフン）　かなしみ、いきどほる
わきぬべし　きつとわくであらう
こけむしぬ　こけが一面に一ぱいはえた
高き（タカき）　高い

八末廣がり

【文意】

笑はせる劇で狂言であります。末廣がりを知らない太郎冠者が都のわる者にはかにされ、大名には叱られ無知をあらはしておもしろくしてあります。

【節　意】

第一節（「かしこまりました」まで）

主人から末廣がりを求めて來る樣に言はれて出かけて行く太郎冠者のこと

第二節（からかうはやして舞はれたらよからう。まで）

都に出て行つて、わる者から傘を買はされて歸るところのこと

第三節（終りまで）

歸つて來て主人に叱られるがおもしろいはやしできげんが直ることが書かれてあます。

【語句の讀みとわけ】

大名（ダイミヤウ）　武士のあるじ（殿樣のこと）

引出物（ヒキデモノ）　お客への贈物

大儀（タイギ）　ごくらうだが

それがし　自分

欲しい（ホしい）

いかにも　その通り

すさりをらう　下つてをれ

げにもさうよ　ほんとにさうだ

九、靜寛院宮

【文　意】

和子內親王が家茂將軍に御降嫁になり、公武一和の望みを持つて居られたけれど、世の變化にその望みも失ひ、二十三歳の御年で國家の急をお救ひになられた御功績について書かれてあます。

【節　意】

第一節

鳥羽伏見の戰がどうして起つたかといふことが書かれ、その戰の不始末をわびて慶喜は謹愼をしたこと。

第二節

靜寛院宮の御身分をのべ、その御不幸な御一生の內にも、國家のため御自身の命ををしまなかつた。

第三節

宮がいよいよ難局に當つて、一度嫁しては徳川の家をはなれず、決然としてこの難局に御身を當らせられた。

第四節

宮の御文章の一節を中心として、その情理に皆感極まつて泣いたといはれてゐる。

第五節

その結果についてで、徳川の汚名はそそがれ開城の約もめでたく成立したこと。

【語句の讀みとわけ】

第二の初めに書かれてゐます。

澤寛院宮	(セイクワンイン ノミヤ)	はからずも
はしなくも		よごれた名、悪いひやうばん。
汚名	(ヲメイ)	かへし奉ること
返	(ホウクワン)	勇みすすむ心
やたけ心		とうとう
遂に	(ツヒに)	つつしむこと
謹慎	(キンシン)	臣下にとつぎなされること
御降嫁	(ゴカウカ)	

崩御	(ホウギヨ)	天皇のおかくれあそばされること
憤	(オンイキドウリ)	おぼこりになること
御憤		おひうち
追討	(ツイタウ)	おほまかで心が廣いこと
寛大	(クワンダイ)	願ひ
請ひ	(コひ)	はげしい意見
硬論	(コウ・ロン)	そのやうにして下さい。
あらせられ		

十　太陽

【文意】

あらゆる生命の源泉である太陽を、自分等の生活のことにたとへて說明してある文章で太陽の偉大さがよく分ります。

【節意】

第一節（あらゆる生命の源泉なのである。まで）

太陽の熱と光によつて地球上のすべてのものは生存するのであること。

第二節（十一年を週期として增減してゐる。まで）

太陽の大きさ、地球との距離、熱量、光の強さなどのことが説明してあります。

第三節（終りまで）

太陽に例を取つて宇宙の廣く大きなこと。

【語句の讀みとわけ】

否（イナ）　そうではない
源泉（ゲンセン）　いづみのみなもと。おほもと
凡そ（オヨそ）　大體、おほまかに
廻つて（マハつて）
零（レイ）
ごま粒（ごまツブ）　ごまのつぶ、ごく小さい。
つむじ風　うづまき
週期（シウキ）　一定の期間として
増減（ゾウゲン）　ましたりふへたりすること
宇宙（ウチユウ）　天地

十一、梅が香

第一句

早春のあけがたのすがすがしい感じを持つた句で「明け方山路を歩いてゐると、どこからとなく梅の花のかをりがして來たので、はつとするとそこへのつと朝日があらはれた」といふ句です。春の季節で、梅がその季節を表します。

第二句

山路を歩いて來て、ふと美しくゆかしい、すみれ草をみつけ、何となく山の奥路でのことなのでゆかしさを感じる。――自然のものに對する心持がうかがはれます。春の季節です。

第三句

靜かにすんだ池に、突然どぶんと蛙がとび込んであたりの靜かさをやぶつたが、又もとの靜かさにかへつた。といふ場面でよくそのあたりの樣子を思ひ起させます。春の季節です。

作者　芭蕉は俳聖と言はれるほどの人で、人がらも立派な人でした。本名は松尾宗房といつて伊賀に生れた人です。

第四句

春の海は、風もなく波もなく、一日中のたりのたりとおだやかである。――春の海の靜かなことをよんだ句でその海を眼前にながめるやうな感じを受けます。春の季節ですね。

第五句

春雨が降り靜かな一とき、ふと屋根をみると手まりが引つかかつてゐる。——春雨にあたりが靜かにかすんでゐるやうです。

第六句

廣々とした菜の花畠に立つてゐると、日は平野の西のかなたに落ちかゝり、ふとふりかへつてみると月は、うつすらと東の空にのぼりはじめてゐる。春の季節です。

第七句

すそ野は綠に包まれ、もえ出るやうな若葉の中に富士山が一つはつきりとそびえ立つてゐる、——夏の初季です。

作者　蕪村は谷口と言つて俳句にも第一人者であるが、又畫の方面にも相當に名聲をのこしました。

【語句の讀みとわけ】

山路（ヤマジ）　山のみち
何やら一　なんとなく
かはづ　蛙のこと
ひねもす　終日。一日中
菜の花（ナのハナ）
うづみ　うづめが普通で。うづめること。

十二　雪國の春

【文意】

長い間、雪に降りこめられてゐた北の國に、春がおとづれて來る樣子を「黑い土」と「せり摘み」によつて現はしてゐます。子供の生活文です。

【節意】

第一節（黑い土）

空のやうすから書き出されて、春の訪れて來たことを書き、庭におり立つて黑い土をみつけた時のやうすが綴つてある。

第二節（せり摘み）

前の文よりややあとになつて、親子、兄弟でせり摘みをする樂しい場面を綴つたものです。

【語句の讀みとわけ】

崩れる（クヅれる）　少なくなる
減つて（へ・つ・て）　水の細かな粒
水蒸氣（スイジョウキ）
瀨（アサセ）　水の淺くなつてゐるところ

湧き（ワき）
冷たかつた（ツメたかつた）
訪れる（オトヅれる）

たづねて來る

十三　國語の力

【文意】

國語のなつかしさ、尊さ、などが書かれてゐて、國語を正しく知るための文章です。

此の課は自分で節に分けて、みてごらんなさい。卽ちなつかしい國語。尊い國語のわけや、國語の意義、そして又大恩人であること、などいろ〳〵書かれてゐます。

【語句の讀みとわけ】

むすまで　生えるまで
ともすれば　うつかりすると
わきまへず　考へないで
踏んで（フんで）　行つてみて
泉（イヅミ）　水のわき出るところ
緩急（クワンキユウ）　大切な時
赴く（オモムく）　はしること

（終）

昭和二十一年六月廿五日　印　刷
昭和二十一年七月一日　發　行

不許複製

初等科
六年生自習書

定價金拾圓
送料一　圓

編輯者　學修研究會

東京都武藏野町吉祥寺28番地
發行者　塚田　重

東京都神田區神保町3丁目23番地
印刷者　小林保五郎

東京都神田區神保町3丁目23番地
發行所　明修社
電話九段(33)2764・3227

東京都神田區淡路町2丁目9番地
配給元　日本出版配給統制株式會社

塚田印刷所